

事前質問事項

当事者の状況・アセスメント

- ① 視覚障害にも、先天性と後天性の違い、全盲・弱視・文字の認識が困難等、レベルが様々あり、認知の仕方も違うかと存じますが、どのようなアセスメントをされているのでしょうか。全盲の方は晴眼者と一緒に学習しているのでしょうか。
- ② 自分の経験上、視覚障害単体の障害をイメージしにくいのですが（ディスレクシアのような読み書き障害や、ADHDのような要因があり、それに付随した視覚的な問題ではないのか、他の障害に付随して視覚障害があるのではないかと）、視覚障害と裏付けられる症状・見分け方があるのでしょうか。いわゆる「グレーゾーン」のような学習者もいますか。
- ③ 上記、②の質問とも重なりますが、視覚障害にも、二次、三次的な障害が発生する可能性はありますか。肢体不自由の場合、社会経験が乏しいので、二次的に困難が生じることがあります。視覚障害の場合にも、同じように副次的な困難・障害が発生することがあると思いますか。
- ④ 視覚障害者が外国語を学ぶときに使う学習方略（learning strategy）として、何か特徴的な方略はありますか？（他のタイプの学習者はあまり使わないが、視覚障害者はよく使う、のような、あるいは、その逆……）

当事者の周囲

- ⑤ 授業を教える教員と視覚障害の学習者以外に、周囲で何か授業サポートをしていた方がいますか。同じ教室で共に学ぶ学習者はどのように対処していたのでしょうか。
- ⑥ 例えば、視覚障害のある学習者が同じ教室にいる場合、他のタイプの学習者は自分たちの行動様式をどう変える必要があると思いますか。こちら側がマジョリティであるかのような振る舞い、当事者が多数に合わせるようにするのではなく、多数側の振る舞いを考える余地があるのではないのでしょうか。

教師・研究者の立場からの質問

- ⑦ 当事者にインタビューする際に、研究者として考えておくべきことはありますか。（何を聴き、どこまで個人的なことに踏み込むのか、どのようにインタビューしていくのが良いのか等）。
- ⑧ 自分で教材を作るときに、「こういうことに注意して作れば」、視覚障害者用へのアレンジ（点字転書など）が、最小限の手間ですむ……という注意事項はありますか？（晴眼者が作成したものが、当事者にとって使いやすいとは限らないので）
- ⑨ 報告書のタイトルにある「国際共生社会」とは、どのような意味で使われていますか。他の国や地域に移動する子供をイメージしているのでしょうか。
- ⑩ 「点字冊子試験」の件とは別に、何か個人的なきっかけがあって、このような研究に取り組まれることになったのでしょうか。差し支えない範囲で、今後の研究のご展望と合わせて、時間があったらお話し下さい（次の科研課題については、古屋先生よりある程度はお聞きしております）。

以上

現時点で考えている質問は以上です。時間によってはさらに追加するかもしれませんが、当日は何卒よろしく願いいたします。